

< 2015年5月 >

初めての家族葬

国保連合会嘱託 ひがしだ ふみお
東田 文男

COLUMN

母が3月、91歳で亡くなった。実家を継ぐ弟夫婦が家族葬にしたいと言ってきた。必要以上におおげさな葬儀よりも身近な親族で弔いたいという願いのほかに、隣近所のお世話になる葬儀後の法要の大変さなどを考慮してのことだった▼わが家では初の家族葬である。地縁・血縁が残る「田舎」では家族葬に対する抵抗感はまだまだ根強い。葬儀日程はもちろん家族葬にする理由を隣組の関係者に説明してからの葬祭場での葬儀となった。親族の間でも家族葬は初めてとあって微妙な空気が感じられた▼愛用品や祭壇に飾られた生け花を柩に入れ最期の別れをした際は、参列者の接待に追われることなくゆっくりとした時間を持てたことは幸せだった。その一方で、葬儀を聞いたのでと香典をもってこられた人もあり、その対



応に苦慮したのも事実である▼四十九日の法要もなんとか身内で終えることができたが、弟にとっては悩んだ末での家族葬だったに違いない。「社会」との別れであった葬儀を「家族」の別れにしてしまったとはいえ、「隣近所との付き合い方がこれから難しくなるかも…」と漏らした。▼家族葬だけでなく通夜や告別式などを行わない火葬だけの「直葬」が増えているという。人と人

のつながりがますます希薄になっていくといわれるが、形はどうであれ「納得のいく葬儀」にしたいとの思いはだれしも変わらないはずだ。だが、これが難しいと痛感させられた▼3年前、墓を購入した。ところが、連れ合いが散骨でいいと言い始めた。「墓には入らない」ということの

意思表示なのか。さらに子どもが墓守をしてくれるか、どうかも分からない。心配の種は尽きないが、その前にまずは自分の葬儀をどうするかを決めておかねばならない。さて、どうしたものか？